

## 山形の重度障害者「心の詩人」 武久明雄

介護リフトについて語る

近年よくノーリフトケア、抱え上げない介護など介護リフトを推奨する活動を見聞きする。以前から医療や介護などを話し合う場などに患者や利用者、その家族らの意見など取り上げられることはなく、患者不在の医療、利用者不在の介護、専門職だけで創り上げられる医療や介護なの?と感じてはいたものの、僕の生活に必需品となっている介護リフトのことが専門職の腰痛防止とか、腰痛による離職問題とか、、、なぜ支援側だけの視線で語られるのだろう、と疑問を抱いた。介護リフト導入の壁として専門職側に患者さんや利用者さんを機械で移動するなんて失礼よ、とか機器では冷たい感じがする、とかそんな「**人の手神話**」みたいなものが存在するらしいが、僕の体験上、機器の手は人の手より暖かく感じる場面が往々にしてあるのだ。例えば入院中、体重の重い僕を車いすに移乗させる時など看護師さんが大きな声で「武久さんを移動しまーす、手の空いている人は集まって下さーい」みたいな声かけをよく耳にした、そんな時、僕は(僕の移動のために何人もの人が集まってくれてすまないな)と心苦しかった。デイサービスに通っていた頃も、普通の人ならプライベートな空間であるトイレやお風呂、そこにも介助する人は必ずいる、しかしトイレ介助や入浴介助にも介護リフトを使うことによりシートにくるまれ姿勢を保持することもでき要所々で安全に一人きりの空間を演出、患者や利用者の恥かしさを軽減できる、つまり患者や利用者の**自尊心や羞恥心**などが絡む場面では心労が軽減される。よって**人の手よりも機器の手の方が暖かく感じる**、看護や介護する側が楽だと言うことは患者や利用者も楽なのだ。抱え上げる人の想いと、抱え上げられる人の想いが合わさって初めてノーリフトケア、抱え上げない介護の真髄が表れるものだと思う。看護や介護側には腰痛予防となり、患者や利用者には恥かしさなどの心の負担が軽減される、一石二鳥の介護リフトなのです。